

## 第6章

### 高校生活前半における進路の悩みの性差

#### ——進路に悩む女子、親を参考にする女子——

日高 正樹

##### 【ポイント】

- 高校生活前半において、男性よりも女性の方が進路に悩む傾向がみられる。特に、高校1・2年時のいずれにおいても男性に比べて女性は「“自身の適性”や“家族との意見の不一致”に悩む」と答え、女性に比べて男性は「特に悩まない」と答える傾向にある。その性差は高校1年時の方が強く、高校2年生になると関連は弱まる。
- 女性の進路選択における保護者の重要性が挙げられる。男性に比べて女性の方が保護者の話を進路決定の参考にしている。その傾向は、高校1・2年時のいずれも一貫してみられる。

## 1. 問題設定

本稿の目的は、島根県の進学校における高校1・2年生の進路選択における悩みの性差を、クロス集計表と平均の差による分析を通じて明らかにすることである。

なぜ進路意識の性差に注目する必要があるのだろうか。高校生の進路選択は、学歴や就職などの地位達成、あるいは進学先・就職先といった居住地選択など後のライフコース全般に大きく影響する。進路選択過程においては学部選択や職業選択（高松 2022）における性差だけでなく、進学先の偏差値（伊佐 2022）や自宅通学の可否（津多 2017）などにおいても多様な性差が認められてきた。性差に基づく偏在は、結果的に社会的不平等の源泉となり得る。そして、進学の大まかな方向性が文理選択など高校1年時に決定される傾向にあることなどを踏まえれば、高校生活前半の段階で進路意識や葛藤についてどのような性差がみられるかに注目する必要がある。ゆえに、本稿は、高校生活前半における進路選択の性差、特に不利が指摘されてきた女性の特徴について論じる。

こうした議論に関連して、近年、男性と女性で進路選択にどのような意識差があるのかという点について当人の認識に着目した研究として、打越・本田編（2025）がある。同書では、高校生の男女の進路選択における親とのかかわり方の違いに注目した分析が展開されている。具体的には、女性においては親と相談しながら進路選択を行うという「相談モデル」が多数を占める一方で、男性においては親に相談することなく自身の進路決定を行うという「報告モデル」がみられるという知見である。これは、男性より女性の方が進路選択における親の影響を受けやすいことを示唆している。このモデルを用いて福島（2025）は女性に多い相談モデルでは浪人忌避傾向が強まり、男性に相対的に多い報告モデルでは保護者の意向が介在しにくいために浪人意思を貫徹しやすいという傾向を指摘する。また、佐伯（2025）は、男性に比べて女性の方が親との会話頻度が多く、親の期待を踏まえた進路選択を行う形で進路選択が水路付けられる可能性を指摘している。これら女性に偏在する相談モデルという枠組みにもとづけば、進路選択における悩みや参考にする他者には、保護者である親が影響していると想定される。

以上に基づき、本稿では、そもそも「進路選択における悩みの内容」にはどのような性差がみられるのかをまず明らかにする。分析の過程で家族に関する悩みに性差がみられるか確認した後、追加的に「進路選択において参考にする他者」として保護者を重視するか否かに性差がみられるかを分析し、相談モデルとの関連を検討する。

## 2. 分析方法

### （1）データ・分析対象

用いるデータは「高校生の進路意識に関する調査」である。調査実施時期および調査対象者について、第1波（W1）は2024年の6月から7月に実施し、島根県立高校に通う高校1年生（西部・東部を含めた6校）を対象としている。第2波（W2）は高校2年生になっ

た対象に対して 2025 年の 5 月から 7 月に実施している。以後、第 1 波を高校 1 年時、第 2 波を高校 2 年時と呼ぶが、いずれも春から夏までの実態である。なお、調査対象校のうち 1 校は離島地域であるが、分析に際して今回採用する変数については特に異なる傾向が確認されたわけではないため、そのまま分析対象とする。また、本稿は男女の性差に注目するため、性別において「その他」を除いた回答（男性と女性）を分析対象とする。

## （２）変数

分析においては、以下の変数を用いる。

### 【進路の悩み】

進路を選択する際の悩みについてお聞きします。

\*あてはまるものをすべて選択してください。

- ①自分の就きたい職業がわからないこと（「職業」）
- ②家族と意見が合わないこと（「家族との意見の不一致」）
- ③先生と意見が合わないこと（「教師との意見の不一致」）
- ④自分の適性（向き不向き）がわからないこと（「自身の適性」）
- ⑤自分の進みたい専門分野がわからないこと（「専門分野」）
- ⑥希望する進路に進むには、学力レベルが十分ではないこと  
（「進路希望に対する学力レベルの不十分さ」）
- ⑦進路の情報の集め方がわからないこと（「進路情報の集め方がわからないこと」）
- ⑧進路の情報が不足していること（「進路情報の不足」）
- ⑨希望する進路に進むには、お金がかかること（「希望進路への金銭負担」）
- ⑩特に悩みはない（「特に悩みがない」）
- ⑪その他

### 【進路において参考にする人・もの】

進路を決めるとき、次の人の話や物はどのぐらい参考にしていますか。

①～⑪のそれぞれについて、あてはまるものを 1 つずつ選択してください。

- ①保護者の話（以下略）

\*選択肢については、変数を反転させ以下のように処理した。

- （４：とても参考にしている－３：やや参考にしている  
－２：あまり参考にしていない－１：全然参考にしていない）

## 3. 分析

まず、図 6—1 より、高校生活の悩みにおける全体的な傾向についてみる。高校生活前半の悩みに関して、いずれの時期においても 3 割を超える生徒が悩んでいる項目としては、

「職業」、「自身の適性」、「専門分野」、「進路希望に対する学力レベルの不十分さ」、「進路情報の不足」がある。また、2割弱の生徒は「希望進路への金銭負担」に悩んでいる。なお、「家族との意見の不一致」や「教師との意見の不一致」といった他者との合意形成に悩む生徒は1%～6%程度であり、全体としては多くないことが確認できる。

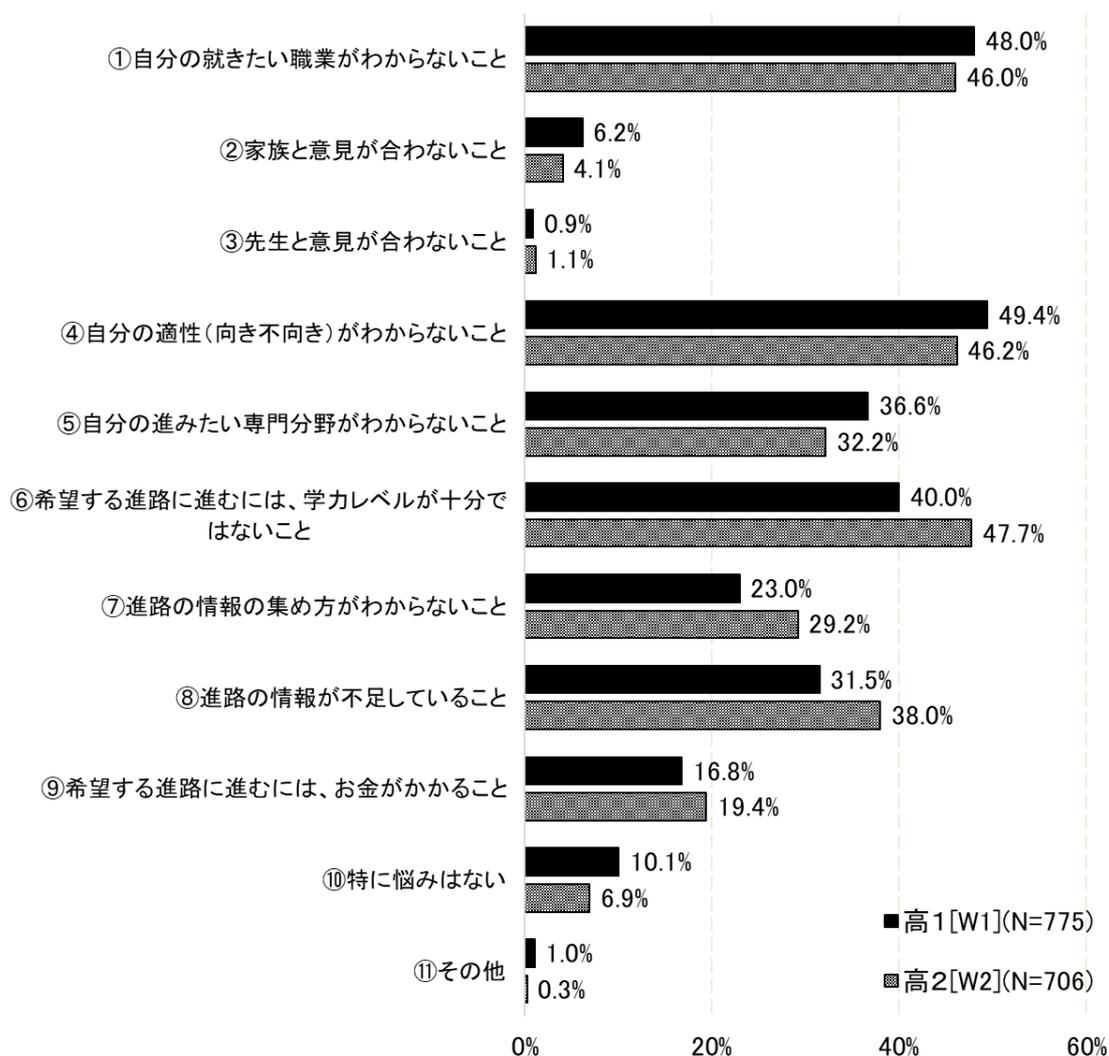


図6—1 進路選択における悩み（高校1年時・高校2年時）

次に、悩みの性差についてみていきたい。高校1年生時点（W1）の進路選択における悩みの男女差についてクロス集計表による分析をまとめたのが図6—2である。1%あるいは5%水準で有意な項目として、男性よりも女性の方が「家族との意見の不一致」、「自身の適性」、「専門分野」、「進路情報の集め方がわからないこと」について悩んでいることがわかる。一方、女性よりも男性に多い項目は「特に悩みがない」のみである。

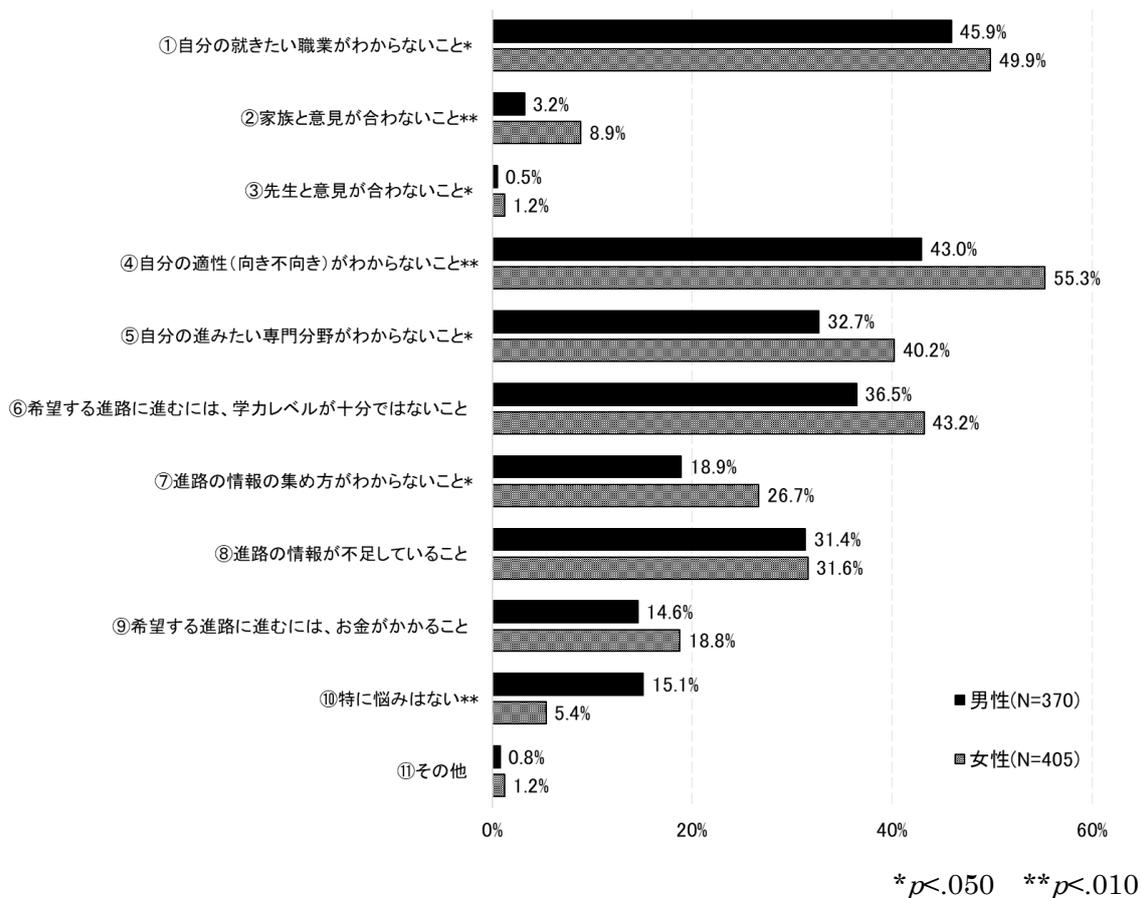


図6—2 進路選択における悩みの男女差（高校1年時 [W1]）

続いて、高校2年生時点（W2）の進路選択における悩みの男女差について確認する（図6—3）。クロス集計表による分析の結果、1%あるいは5%水準で有意な項目として、男性よりも女性の方が「家族との意見の不一致」「自身の適性」「進路希望に対する学力レベルの不十分さ」について悩んでいることがわかる。一方、女性よりも男性に多い回答は、高校1年時と同様に「特に悩みがない」のみである。

次に、高校1年時と高校2年時の悩みについて、関連の強さを比較するためにCramer's Vを確認する。いずれのクロス集計表においても有意であった変数について確認すると、「家族との意見の不一致」（W1=.117→W2=.092）、「自身の適性」（W1=.123→W2=.080）、「特に悩みがない」（W1=.161→W2=.104）となる。全ての変数において関連性指標は高校1年時の方が高く、高校2年時の方が低い。つまり、高校1年生と高校2年生のいずれにおいても悩みの有無や内容には男女差が確認されるが、「自身の適性と家族との意見の不一致に悩む女子」と「特に悩みがない男子」という傾向は、高校1年時の方が強くみられることを示している。

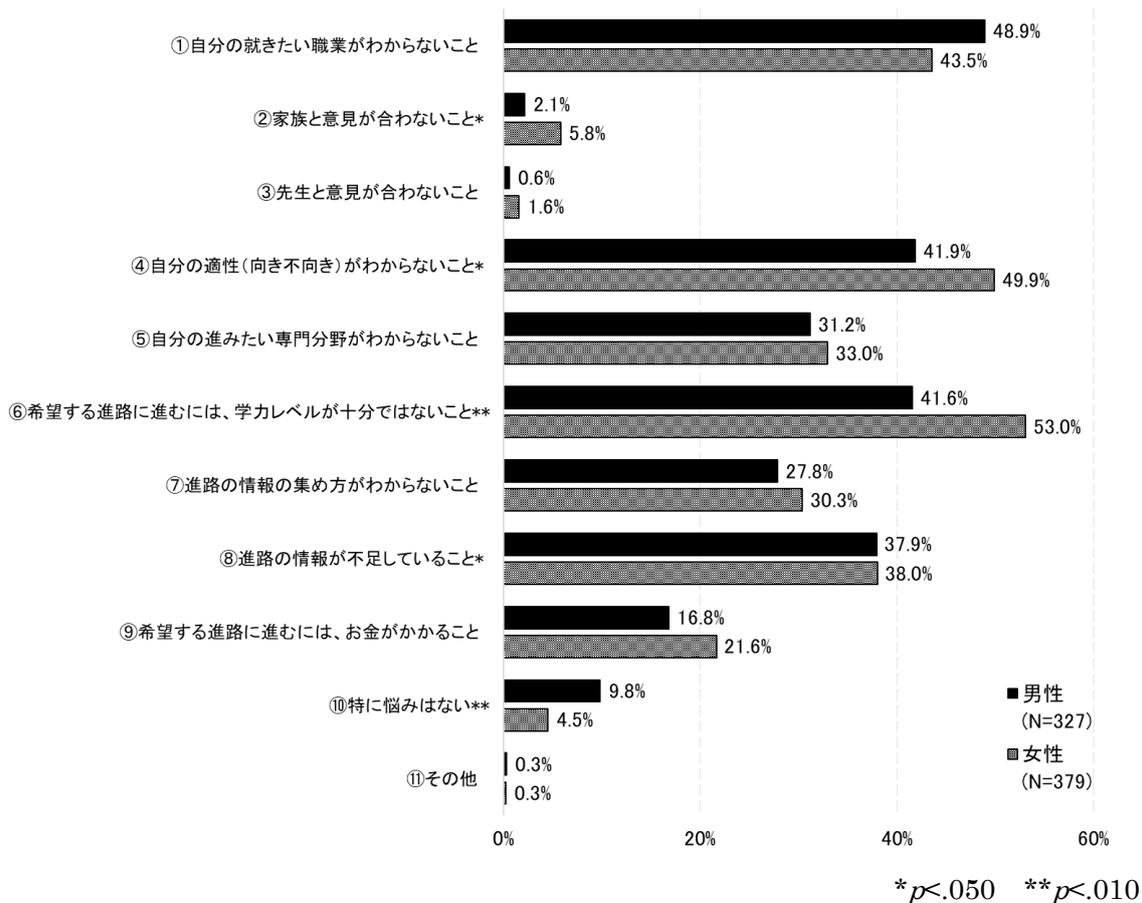


図6—3 進路選択における悩みの男女差（高校2年時 [W2]）

最後に、進路を決める際に保護者をどの程度参考に行っているかという点について性差がみられるかを確認する。平均の差についてt検定を行った結果、以下の表6—1が得られた。まず、全体傾向として、高校1・2年時のいずれにおいても平均値が3を超えていることから、性別にかかわらずある程度保護者の意見を参考に行っていることがわかる。t検定の結果、高校1・2年時のいずれにおいても、性差は有意となった。つまり、進路決定において、男性よりも女性の方が保護者の話を参考にする傾向があることがわかる。

表6—1 進路選択における保護者の参考度  
(1：全然参考にしていない～4：とても参考に行っている)

		平均値	標準偏差
高校1年時 $df=774, t=-3.145^{**}$	男性(N=369)	3.274	0.761
	女性(N=407)	3.435	0.666
	全体(N=776)	3.358	0.717
高校2年時 $df=701, t=-3.395^{**}$	男性(N=325)	3.262	0.678
	女性(N=378)	3.426	0.606
	全体(N=703)	3.350	0.645

\* $p < .050$  \*\* $p < .010$

#### 4. 考察

分析の結果、主に以下の2点が明らかとなった。

第一に、高校生活前半において、男性よりも女性の方が進路に悩む傾向がみられる。特に、高校1・2年時のいずれにおいても「自身の適性」や「家族との意見の不一致」に悩むのは女性に多く、「特に悩みがない」と答えるのは男性に多い。その性差は高校1年時の方が強くみられ、言い換えれば高校2年に学年が上がると性別との関連は弱くなる。

第二に、女性の進路選択における保護者の重要性が挙げられる。そもそも保護者の意見は男女問わずある程度参考にする傾向がみられるものの、男性に比べて女性の方が保護者の話をより進路決定の参考にしている。その傾向は、高校1年時、2年時と高校生活前半において一貫してみられる。

高校生活前半において、高校生は男女問わず進路選択に悩んでいるものの、性差に注目した際に顕著なのは女性がより悩んでいるという実態である。高校に入学して間もない1年時には進路情報の収集方法や自身が選択する専門分野に悩み、高校2年時には自身の学力レベルに悩むなど、その時々重要視されていると思われる悩みは女性が多く抱える傾向にある。そして、高校生活前半において一貫してみられる「自身の適性」や「家族との意見の不一致」に女性の方が悩み、親など保護者の意見を参考にする傾向も強いという事実は、男性に比べて女性が自身の適性に悩んだり、親と何らかのコンフリクトを抱えたりしながら、それらを親と「相談」して解決しようとする姿を想起させる。そもそも進路選択によく悩む女性の中において、親との意見の不一致に悩む女性が少数存在する。これは誰で、いかなる意見の不一致があるのだろうか。今後、質的調査などに関連させて明らかにすべき課題である。

#### [文献]

福島由依, 2025, 「第2章 最難関大学志望者にとっての『浪人』とジェンダー——保護者との関係における意思決定モデルに着目して」打越文弥・本田由紀編『進学校の進路選択とジェンダー——高校生たちの描く未来』大月書店, 61-88.

伊佐夏実, 2022, 「難関大に進学する女子はなぜ少ないのか」『教育社会学研究』109: 5-27.

佐伯厘咲, 2025, 「第3章 進路選択のジェンダー差における性役割意識を再考する——親の意見に着目して」打越文弥・本田由紀編『進学校の進路選択とジェンダー——高校生たちの描く未来』大月書店, 89-113.

高松里江, 2022, 「進路選択におけるジェンダー・トラック——男女間・同性内の進路希望の違いに着目して」『理論と方法』40(2): 170-183.

津多成輔, 2017, 「女子高校生の性役割観と大学進学意識——自宅通学の可／不可に着目して」『教育学系論集』42(1): 27-40.

打越文弥・本田由紀編, 2025, 『進学校の進路選択とジェンダー——高校生たちの描く未来』大月書店.